

犯罪被害者遺族の手記 ～兄妹の立場から～

もしも^{あなた そば}貴方の傍に兄弟を亡くされた方がいた時、なんと声を掛けますか？

わたしが、周囲の人から掛けられた言葉は、次のようなものでした。

「ご両親は大変だから、あなたが頑張って、ご両親を支えてあげるんだよ」

「ご両親はかわいそうだ」

「お兄さんの分まであなたがしっかり生きなくてはいけません」

最初は、その言葉を素直に受け入れました。でも、あとで

「頑張れって言われても、これ以上なにをどう頑張ればいいのかのさだろう」

「わたしも遺族のはずなのに、どうしてわたしだけが頑張らなければならないのさだろう」

「兄弟を亡くした悲しさは、子供を亡くした悲しさよりも軽いのだろうか？」

そんなふう^にに反発を感じて、ひどく落ち込む結果になりました。

もちろん、声を掛けて下さった方々に悪意があったわけではないでしょう。でも、掛けられた言葉は、わたしの負担になるものでした。

わたしはずっと、どうしてそんな言葉を掛けられるのさだろうと疑問に思っていました。そして、あまり兄弟の気持ちについて語られていないのではないかと思うようになりました。

これまで犯罪被害者遺族の実情に関して、社会的な認知は低く、最近ようやく取り上げられるようになりました。でも、兄弟の実情に関してはもっと認識が低いようです。

今まで兄弟としての声をあげておられる方もいらっしゃいます。でも、全体の数から比べると、ごくわずかです。

わたしの体験がすべての事例に当てはまるわけではありません。ただ、同じ思いをしている方の気持ちを少しでもお伝えできればと思います。

では、当時のわたし達家族の話から始めます。

わたしの兄は、2001（平成13）年12月14日、午前2時40分頃、姫路市のファミリーレストランの駐車場で、交際していた女性のバックを盗んだ男の車を止めようとしてひき逃げされ、死亡しました。

その当時我が家は、父と母と26歳の兄と、22歳のわたしの4人家族でした。兄は健康食品を扱う会社に勤めており、そこは出来てから10年、社員が30人ほどの新しい会社でしたが、兄は希望を持って皆で会社を大きくするのだなどと張り切っておりました。

兄とわたしは幼いころから^{けんか けんか}喧嘩らしい喧嘩もせず、わたしは本当に兄のことを尊敬してましたし、兄もわたしを大切に^{いづく}慈しんでくれました。兄は社会人になって忙しくなっても色々な相談にのってくれ、いつも支えになってくれました。兄はわたしにはなくてはならない存在でした。

一方、わたしは大学四年生で、就職先も決まって卒業論文に追われている毎日でした。事件の起こった日は卒業論文の提出日でした。

その日まで論文の追い込み作業をしていたわたしは生活リズムが食い違い、兄とほとんど顔を合わせることはありませんでした。事件が起きる5日前、兄がわたしの部屋にきて、ハリー・ポッターの映画の話をしてくれましたが、その時、わたしは論文のために机の前に座っていて、兄には背を向けながら話をしました。今思うと、なぜあの時手をとめて正面を向き、兄の顔を見ながらゆっくりと話さなかったのかと後悔の気持ちでいっぱいになります。そのあと兄とほとんど話ができないまま、事件が起きてしまいました。

事件が起こったのは、深夜のことでした。わたし達が住んでいるのは大阪ですが、事件は姫路で起こりました。当時兄と交際していた女性から、(ここではA子さんとさせていただきます)真夜中に電話がありました。兄とA子さんは年が明けたら両方の親にも紹介し、指輪も買いに行こうと計画していたそうです。でも、わたし達家族はその時まだA子さんのことを知らされていませんでした。

わたし達はすぐ車で姫路に向かいました。姫路までの道路はひどく混んでいました。

兄が姫路に向かった時間帯は、わたし達が通った時よりももっと道路が混んでいたようで、いつもなら1時間半で行けるところが、倍以上かかったようです。

そのため、兄もA子さんも普段ならそんな時間まで出歩くようなことはしないのに、その日に限ってとても遅くなってしまったそうです。

兄は12月14日、姫路市のファミリーレストランで食事をした後、駐車場の自分の車の中でA子さんと喋っていました。そして2時40分頃、近くに停めていたA子さんの車の中から男が白い靴を盗むのを目撃しました。男は白いワゴン車に乗って逃げようとし、兄は阻止しようと車の3メートルほど手前に立ちました。しかし男は他の出口があったにもかかわらず、兄に向かって発進し、ブレーキも踏まずに兄の体を車体に巻き込んで逃走したのです。

わたし達がA子さんの電話をうけ、姫路に向かう途中、A子さんから「まだ着きませんか」「まだですか?」と何度も電話がありました。電話はわたしの携帯にかかって来ていたのですが、5時前にかかってきた電話で、A子さんが急にわぁっと泣き出しました。「あっ…」と思いましたが、両親には恐ろしくてとても言えませんでした。わたしが絶句していると、急に電話の相手が変わりました。看護婦長です、というその女性は、「重篤な状態です。道はわかりますか」と丁寧に尋ねられました。でも、それが余計に怖くて何も言えなくなり、電話を切ったあと、「A子さん、なんて言ってた?」と母に聞かれた時、「重篤な状態だと言ってる。とりあえず高速を降りたら道を教えてもらう」と答えました。兄はその時すでに亡くなっていました。

病院についた時、兄は全身を包帯で巻かれた姿で、すでに延命装置が取り外されていました。亡くなっていることはすぐに分かりました。母が兄にとりすがって「ゆう君、どうしたん?」「何

があったん」と顔を包みこんで言うのを見ながら、わたしはただ呆然として、何も感じられませんでした。

頭では兄が亡くなったという事実は理解できました。けれど、こみあげてくる悲嘆^{ひたん}とか怒りとか、そういう気持ちは感じられませんでした。まるで夢かドラマでも見ているような気持ちでした。妙に冷静で、卒業論文の提出やアルバイト先への連絡をどうしようなどと考えていたのです。

A子さんと両親は混乱していました。とくにA子さんを、わたしが慰^{なぐさ}めなくては、と思いました。A子さんは何度も謝罪していて、両親はA子さんをひとことも責めませんでした。A子さんの相手をするのは両親には負担だろうと思ったのです。

自分に与えられた台詞と役を、ちゃんと演じなければならない、そんな気持ちでした。

遺体と共に家に戻ってから混乱の中で通夜^{つや}、葬式^{しよなのか}、初七日と続く仏事^{ぶつじ}がありました。兄が亡くなったという実感が出てきたのはこの頃でした。

最初はお通夜^{つや}でわたしの友人^か達が駆けつけてくれた時でした。それまでは兄のお通夜^{つや}ではなく全く別の誰かのお通夜^{つや}なのだという気持ちにさえなっていました。でも、友人達の顔を見てようやく夢と現実の境目がなくなって、死んだのはわたしの兄だと思えるようになったのです。

わたしは友人に、もし卒業論文を自分で提出できない場合は、提出しておいてほしい、教授やサークルの皆には自分ではとても言えそうにないから、伝えておいてほしいなど、事務的な話をしました。そうしていると、どこか遠かった現実がじわじわと自分の身近に迫ってきて、ぞっとしました。

後で友人から聞いた話では、この時のわたしは、真っ青になりながら笑顔でいたそうです。

その後わたしは大学へ行って卒業論文を提出し、アルバイトを辞めることを職場先へ言いに行きました。でも、そこまでが限界でした。わたしは何もかもが負担に感じるようになり、現実から逃れて部屋に閉じこもるようになりました。

部屋の中でわたしはずっと本を読んでいました。本の世界に逃避したのです。でも、「殺人」とか「事故」といった単語が出てくると発作^{ほっさ}のように恐怖感が襲ってくるのです。読めたのは学術書や研究書ぐらいで、テレビにいたっては見ることもできませんでした。

しばらくして兄が使っていた携帯電話やパソコン、カードなどの名義変更や契約停止の手続きをすることになりました。本当は嫌でしたが、両親には他の用事もあったので、両親がわからないそういった手続きはすべてわたしがやりました。手続きするたびに兄とこの世を繋いでいる糸を一つ一つわたしが切っていくように思えて、まるで自分が兄を殺していくようでとても恐ろしく感じました。こういった手続きはシステム上、他人には出来ないのですが、せめてきちんと整理して教えてくれる人がいたら、どんなにいいだろうかと何度も思いました。

両親はわたしに負担を掛けることを申し訳なきようにしながら、わたしにしか出来ない部分はわたしに頼みました。もしわたしがもっと幼かったら頼まなかったかもしれません。あるいは、

もっと大人だったらわたしが両親の負担を軽減してあげられたかもしれません。

両親に何か頼まれると、わたしはそれを非常に重苦しく感じました。でも果たし終えてありがたいと言われると嬉しい^{うれ}と思いました。

周囲の人々から「ご両親は大変だから、あなたが頑張っ、ご両親を支えてあげるんだよ」と言われてそれを実行しなくては、という思いもありました。

ただ、そんな日が続くうち、兄が死んだのに、自分が必要とされることを喜んでいるような気持ちに気が付いて、どんどん落ち込むようになりました。

事件から3か月ほどたったころ、わたしは両親の悲しむ姿をみているうちに、兄に代わってわたしが死んだ方がよかったのではないかと考えるようになりました。

母が朝食を作る時、無意識のうちに目玉焼きを四つ作ること。父が兄からプレゼントされた財布をなでていること。声を殺して泣いているのが聞こえること。

そういう状況を感じると、しんと胸の奥が冷たくなり、自分が生きていることに罪悪感を感じました。生きていることがひどく苦しかったのです。なにか楽しいことがあったら、あとで自己嫌悪でのたうちまわりました。兄が死んだというのに笑って生きている自分がとてもひどい生き物のように思えたのです。

兄のお友達や会社の方と話して、兄がどれだけ多くの人から必要とされていたかを感じると、どうして事件にあったのが兄の方だったのだろうか、事件にあったのがわたしだったらよかったのにと思いました。

このころ家族の関係も、ぎくしゃくしてきました。父の精神状態が不安定になって、両親が言い争うようになりました。父は普段はとても温厚で誠実な人間です。兄もわたしも父に叩かれた^{たた}ことなど一度もありませんし、人を傷つけるような言葉を父の口から聞いたこともありません。

けれど、この時期の父は、どこにも吐き出せない気持ちを母にぶつけるしかなかったのです。

家族全員が悲しくてつらいと思っているのに、気持ちがすれ違って傷つけてしまうのです。

絶望して、いたたまれなくなったわたしはどうとう、どうにでもなっ^やてしまえ、という投げ遣りな気持ちで、「友人の引越しの手伝いをするから」と1週間ほど家を離れることにしました。

わたしを誘ってくれたのは東京で就職が決まった友人でした。彼女はわたしが家にいるのが苦痛なのだと察してくれたのか、「引越しの手伝いをしてくれない？」とごく当たり前^やに誘ってくれました。そして、わたしは一週間、静かな環境でのんびりさせてもらったのです。

1週間がすぎ、さあ、また喧嘩^{けんか}かな、と覚悟して帰宅すると、両親の様子は前と一変して、すっかり落ち着いていました。その時はわたしの不在が両親になんらかの影響を及ぼしたのかと思いました。

でも、わたしの方にも原因があったのだと思います。わたしの心に余裕がなかったことが、ささいなことでも過敏にとらえていたのでしょう。

それまではずっと家に閉じこもっていましたが、それから、少しずつ外に出るようになりました。映画を見に行ったりコンサートに行ったり、友人達が機会を見つけてちょくちょく誘い出してくれました。

どん底だったわたしの気持ちを救ってくれたのは、友人達でした。

後で聞いた話ですが、お葬式に参加してくれた友人達は、その時「これから、自分達に何ができるか」ということをすでに話し合っていたのだそうです。

そして「忘れなさい」とか「過去を振り向かないで」とか、事件をなかったことにする声が多かった中で、友人達は「事件にあったことを特別扱いするのではなくて、事件ごと当たり前を受け止めよう」と決めていたのだといいます。

4月になって、わたしは社会人になりました。世の中に出てみると、世間は戸惑^{とまど}ってしまうくらい平和なものでした。兄の事件はわたし達家族にとって、人生を変えた重大な出来事でしたが、世間では新聞の一記事にすぎませんでした。わたしをよく知る人でさえ、完全に理解してくれることはありませんでした。世間の日常が押し付けられ、全身全霊^{ぜんしんぜんれい}の勇気をふりしぼって事件の話を打ち明けても共感を得るのは難しいことでした。

ある日、軽く笑われて「精神的負担ってやつ？」と冗談めかして受け流された時から、わたしは聞かれても事件の話をしなくなりました。

入社して1年後、わたしは会社を辞めました。

その会社は印刷会社だったのですが、業務の関係で帰宅がとても遅くなるのです。母はわたしの帰宅が遅くなると、兄のように事件に遭^あうのではないかと不安になるらしく、母とは帰宅時間のことで何度も揉めました。

仕事自体は楽しいものでしたが、時勢もあって会社の業績も悪くなる一方でしたから、家族の揉め事の種になるなら辞めた方がいい、と思いました。

そしてもうひとつ、この時期、わたしの中でひとつの考えが固まっていました。

「どうせ明日には死ぬかもしれないのだから」

という考えです。

当時のわたしの中では「明日死ぬかもしれないのだから、今日を笑って過ごせるように生きよう」「明日死ぬと思えばなんでもできる」という前向きな考えのつもりでした。

けれど、世間一般的にみれば、「今を着実に積み上げていけば遠い未来に夢が叶^{かな}う」という考えの方が健全です。

実際、ある人に自分の気持ちを話したところ、「そんな刹那^{せつなてき}的な考えは良くないと思う」とたしなめられました。

けれどわたしは一生懸命頑張っている、突然誰かが壊しにくるのではないかと、積み上げたも

のをぐちゃぐちゃに踏みつぶされてしまうのではないか。もうこれ以上、心を痛めたり苦しい思いをしたくない、と身がすく疎んでしまって、未来の話は不安で不安でたまりませんでした。

そして結局、わたしは目の前のことをただ黙々とし続けることしか出来ませんでした。

事件から1年くらいたったころ、わたしは自分の中に悪魔と死神がすみついていることを自覚し始めました。兄がかわいそうで、両親がかわいそうで、どうしてわたしの周囲の人々がこんなに苦しめられるのだろうかと思うと、犯人を殺したいと思うようになりました。

そして、兄の代わりになれるのなら、喜んで死んであげるのにと思いました。実際、何度も実行を考えました。

ただ、そう思うたびに、「これは単なる自己満足と陶酔とうすいに過ぎない」「現状から逃げようとしていただけだ」と自分の弱さを直視しなくてはならなくなりました。

不幸の中におぼ溺れて深みでもがくことは、とても苦しくつらいものです。けれど、深みにもぐることも出来ず、無理矢理外に連れ出されて、未来に向かって歩きなさいと言われても、とてもつらいのです。

「お兄さんの分までしっかり生きなさい」と言われても、何をどうやって生きればいいのかなんて誰も教えてはくれません。

苦しんでいる両親を支えたいと思い、事件の前のような家に戻したいと願って、ある日わたしは両親を旅行に誘いました。けれど、両親は今はその気分にはなれないと言いました。では、兄の代わりになろうと思って、兄の役割を引き受けようと思いました。でも「お兄ちゃんみたいにアンタも死んでしまうような気がするからやめて」と言われました。

兄の命を背負って、自分がどこへ向かって生きていけばいいのかもわからないまま、時間だけが過ぎていきました。

犯人が逮捕たいほされるまでの1年半、わたし達家族は懸賞金をかけ、ピラ配りを2回行いました。わたしは両親に言われてピラのデザインをしましたが、作成している間は頭痛と吐き気に襲われて、とにかくつらく、誰か変わりにやってくれる人はいないかと苦しくてたまりませんでした。

2003（平成15）年6月29日、犯人は逮捕たいほされました。犯人は前科5犯で逮捕時は31歳、無職の男でした。犯行の時、車に同乗していた従妹いとこの女ふたりと、車を処分し、証拠隠滅しょうこいんめつをはかったその父親と、仲間の男2人も逮捕たいほされました。

裁判ではわたしと母とA子さんの3人で証人尋問しょうにんじんもんを受けました。最初に意見陳述いけんちんじゅつをさせてくださいとお願いしていましたが、証人尋問しょうにんじんもんの方が証拠として採用されるからと言われて、意見陳述いけんちんじゅつと証人尋問しょうにんじんもんの両方をさせていただきます。意見陳述は母とわたしのふたりでした。すこしずつ前に進んでいることが嬉しく、ピラ配りの時のようなつらさはありませんでした。でも文面を考えたりそれを読む練習をしたりするのはやはり苦痛でした。持ち込む遺影を、裁判所の指示す

るサイズにパソコンで作り直したり、^{いけんちんじゆつ}意見陳述書を書いたりする作業を、わたしは泣きながら行いました。

裁判では犯人に殺意があったかどうかを争いました。犯人は、兄に向かって発進し、ブレーキを一度も踏まなかったにもかかわらず、「速度は出ていなかった、殺すつもりはなかった」と主張しました。高等裁判所では被告側弁護士が弁論を行い、兄が車の前に立たなかったらこの事件はなかったなどと言いました。

でも、どちらも判決は求刑どおり^{むきちょうえき}無期懲役というものでした。

2005（平成17）年4月13日、NHKの夕方のニュースで最高裁判所が^{じょうこく ききやく}上告を棄却したと放送があり、14日の新聞に載りました。ようやく終わったとほっとしましたが、通知がなかなか送られて来ず、わたし達について頂いている弁護士に調べてもらったところ、最高裁で判決が出たあと、3日以内は異議申し立てができるという規定があり、犯人は異議申し立てをしたということでした。結局それも^{ききやく}棄却され、4月26日、今度こそ^{むきちょうえき}無期懲役が確定しましたが、犯人は反省しているとか、^{ばいしょう}賠償するとか、臓器提供の意思があるとか、口先では、神妙なことを言って、実際は自分の量刑を軽くするため、裁判制度の使える権利はすべて使いきったのでした。



高裁（控訴審）の後、わたしは別の会社に就職しました。

今度は就労時間をきちんと調べ、帰宅が遅くならないようにしました。

事件から3年後、兄のことも一区切りついて、わたしはもう事件に遭^あう前の自分に戻ったつもりでいました。

採用の面接の時、兄の事件のことも話しましたが、隠しておくほうがむしろ後々問題になるだろう思っただけで、自分には何も問題はないと考えていました。

わたし自身も周囲も、事件から3年も経てばすっかり元通りのはずだと考えていました。けれど、今から思うとその考えは間違っていました。

事件の後、被害者や被害者遺族が自分の感情をコントロールできなくなるのはよくある事だと思います。しかし時期は人それぞれです。

わたしの場合は、この時期に完全にコントロールできなくなっていました。

初対面の人と会話をする時、どこに住んでいるのか、家族は何人か、兄弟はいるのか、という話は普通の話題だと思います。

けれど被害者兄弟で、兄弟の話をするのが得意だという人には会ったことがありません。兄弟の存在を聞かれて「一人っ子です」と答えて、罪悪感に落ち込むという方もいらっしゃいます。

わたしは兄のことは隠すつもりはありませんから、兄弟の話をされたら「兄がいます」と答えています^{たいてい}が、詳しく聞かれない限り、事件の話はしません。生前の兄の話をしていれば、大抵話はそれで終わるからです。

ところが、ある時何かの話の弾みでわたしは兄の事件の話をしてしまいました。

話はぱっと広まって、職場の人全員が知るところとなりました。

するとその日から、何となく空気が変わったような気がしました。

何か言われたわけでもなく、意地悪をされたわけでもなかったのですが、話をする時、こちらの目を見てくれないとか、「わたしだって苦勞している」というようなことを言われたりだとか、そんな些細^{ささい}なことが気になるようになりました。

今思えば、ほんの一握りの人が態度を変えたただけだったのですが、わたしは職場の人全員に対して不信感を感じてしまいました。

そういう気持ちでいますから、やはり仕事にも影響が出てしまいます。

仕事をする上で、周囲の人とのコミュニケーションは不可欠です。

けれどわたしはただでさえややこしい状況なのだから、極力人と関わらないようにしよう、自分の仕事を完璧^{かんぺき}にしようと思うあまり、周囲の人と足並みをそろえることを忘れてしまいました。

そうしてますます孤立し、自分のことで精一杯になってしまいました。

自分はきちんとやっているのに、被害者遺族という偏見で理不尽な仕打ちを受けている、と聞

違ったマイナスの気持ちでいっぱいになってしまったのです。

よくよく思い出せば、きちんと手を差し伸べてくださった方も、励ましてくださった方も、支えようとしてくださった方もいました。

けれど気持ちに余裕がなくて、わたしはそのことに気づけなかったのです。

あの時、「大丈夫です」と言わずに、なぜ「ありがとうございます」と言えなかったのか、今でも後悔しています。

一言、「助けてほしい」と言えばよかったのかもしれないと思うのです。

「絶対泣かないよね」と言われたこともあります。けれど、その時のわたしは「泣いても何も解決しませんから」、「負けるみたいで嫌なんです」と答えました。

実は事件直後からわたしはひとつ、決めていたことがありました。

それは、兄の事件から逃げない、何があっても兄の事件のせいにはしない、ということでした。

わたしは、職場で泣いて助けを求めることは、兄を殺した犯人に負けることだと思っていました。

兄を殺した上に、わたしまで不幸にするのか、そんなことは許せない、絶対に負けるものか、とわたしはそう考えていました。

実際には、わたしが入社する前から職場が抱え込んでいた業務内容や複雑な人間関係が問題であって、わたしが被害者遺族であるということは、あまり関係なかったのだと思うのですが、頑かたくなにそう思い込んでいたわたしは自分から差し伸べられた手を振り払い、孤立してしまいました。

結局、その会社は8か月で辞めてしまいました。

この頃が一番苦痛で、一番反省点の多い時期でした。

最大の反省点は、自分はもう元通りだ、という認識でした。

そうではなかったのです。わたしはまだ不安定で、一生懸命平気なふりをして無理をしていたのです。

周囲の人に合わせることも出来ず、目の前の仕事だけを片付けて、一言も喋しゃべらずに、毎日泣きながら帰っていました。

少し自分を甘やかそう、と思ったのは、会社を辞める前でした。

会社を辞めた方がいい、今のままでは誰にとっても良いことなんてない、そう考えていた時、関東の友人が誘ってくれて東京に行くことになりました。

その時、会社の愚痴ぐちを聞いてくれた友人は、「あなたの言うことは間違っていない。でも、正しさというのは誰かを責めるための道具ではない。自分を戒めるためのものだと思うよ」と言いました。

わたしはその時、初めて目が覚めた気がしました。ようやく自分が危うい方向へ進みかけていたことを知ったのです。

会社を辞めて、たぶん事件後初めて、わたしは自分自身のために何がしたいのだろう、と考え

ました。

事件後、誘われたら遊びに行っていました。この頃ようやく自分ひとりでも買い物にいたり、遊びにいたりするようになりました。

好きなことをしていると、気持ちがほぐれていくのが分かりました。

自分が悪かった部分も見えるようになってきました。

後に同じような立場の人と話した時、彼らも周囲の人々との関係について悩んでいることを知りました。

兄弟をなくした人は、両親を支えてあげなければならない、悲しませてはならないと思う一方で、この苦しみから逃れたい、事件なんてなかったことにしたいと、二つの感情の間で板ばさみになります。

誰かのために自分の感情をおしこらして、全く関係のないところで爆発させてしまったり、逆に兄弟の死について一切拒否するようになっていたりします。

自分の感情と向き合いながら、周囲との折りあいをつけていく。そのバランスがとても難しいのだと思います。

爆発することも拒否することも出来ない時は、死ぬことばかり考えてしまいます。

わたし自身、何度も死にたいと思いましたが、友人のひとりがこんなことを言ってくれました。

「周囲の人の幸せが、自分の我慢の上にあるなんて、そんなのは嘘だ。まず自分が幸せじゃなきゃ、周囲の人を幸せには出来ない」

それを聞いて、頑張りすぎなくてもいいのだ、と思いました。頼れる時には頼らせてもらい、妥協できるところは妥協し、利用させてもらえるところは利用する。それで少し楽になりました。

もし誰かが辛くて悲しい時、わたしならどういう言葉をかけるのだろうか、いつも考えます。

そういう時は、自分がかけてもらって嬉しかった言葉を思い出します。

「無理しないで」「泣きたい時には、思う存分泣いたらいいよ、嫌ならやめちゃえ」

は
捌け口のない気持ちによりそって、同じように感じて受け止めてもらう。それが一番ありがたいものです。

頑張りとか、支えてあげなさいとか、お兄さんの分まで、とか。そういう言葉はわたしには負担でした。

自分の中の悪魔と死神に気付いた時に、そういう気持ちがあることは悪いことなのかと聞いたことがあります。宗教においては、それは悪いことだといわれました。一般道徳としてもよくないことでしょう。

でも、「過去は忘れなさい」といって、「愛する人の死」をなかったことにすることが正しいとは、わたしにはどうしても思えません。自分のなかの悪魔と死神を見つめつづければつづけるほ

ど、やっぱり自分が兄を大切に思っていたのだということに気付かされるのです。

犯人が口先だけの謝罪をした時、マスコミの方に「犯人をゆるせるか」と聞かれたことがあります。でも、わたしはゆるせないと答えました。

犯人を許す、というのはどういうことなのでしょう。事件をなかったことにする、という意味なら、事実として事件はあったわけですから、それは不可能です。

とりわけ傷害や殺人といった、失ってもう元に戻せないものを、どうしてなかったことにできるのでしょうか。

わたしはある人に、「許せるということがあるのなら、たぶん、それは絶望的に諦めた時です」と答えました。

わたしは、世間の人覚えていなくても、世界中の人が忘れてしまっても、死ぬまで決して事件のことを忘れてはいけないのが加害者だと思うのです。

それが加害者が最低限行わなければならない、責任だと思うのです。

犯人によって断ち切られてしまいましたが、兄には未来へ続く予定や約束がありました。事件の前日、わたしはある旅行会社に予約を入れました。

家族4人で、旅行に行こうと計画していたからです。

帰宅が遅くなる、と連絡してきた兄に、母が「予約とれたよ」と話し、「ありがとう」と答えた、それが兄が家族に向けた最後の言葉になりました。

兄の会社で社員旅行に行くはずだった日は、お通夜、お葬式の日になりました。

会社の皆さんは旅行を取りやめ、全員がお葬式の手伝いに来てくださいました。

兄はクリスマスには彼女と旅行し、お正月にはそれぞれの家に挨拶に行く予定だったそうです。

わたしは事件直後、兄の財布から領収書を見つけ、兄が予定していた宿泊先にキャンセルの連絡を入れました。

けれど、もうひとつ予約票もメモもなかったためにキャンセルできなかった宿からクリスマス当日、連絡がありました。

ちょうど兄のお友達がお参りに来てくださっていた時で皆びっくりしました。

わたしは事情を述べ、ご迷惑をお詫びして、キャンセル料を払いますから請求書を送ってくださいとお願いしました。けれど、結局その宿から請求書をいただくことはありませんでした。

家族旅行を予定していた日は、兄の四十九日になりました。

わたし達家族は知りませんが、他にも沢山の約束や楽しみにしていた予定が失われたのだと思います。

人の命を奪うということは、その人が当然生きるはずだった未来をも奪うということです。

わたし達にはこれから、兄の結婚、子供の誕生など、兄が生きているからこそ生じる日々の暮らしが当然のようにあるはずでした。わたしは社会人になってから、何度も、兄の助言を欲

しいと思いました。

兄の友人の皆さんも、お盆や命日めいにちに訪ねてくれては今も兄がそこにいるように兄との思い出を語ってくれます。わたし達はこれからも何度も、兄がいれば、という言葉を使い続けるでしょう。その度に、わたし達は自分達が手に入れるはずだった未来を奪われてしまったという現実を思い知らされるのです。それらすべてが、犯人が犯した殺人という罪の深さなのです。

兄の死に意味があっただなんて言われたくはないですが、わたしは今後わたしが生きていくなかで、兄の生と死に、意味を見出さなくてはならないと思っています。兄の死を言い訳にして現実から逃げるのではなく、ちゃんと前を向いて同じようにつらい気持ちを抱えているひとに、手を差し伸べられたらと思います。

わたし達ひとりひとりの中に、乗り越える力があるのだと思います。そして誰かを助けられる何かの力があるのだということをこれまでの活動の中で知りました。

同じ悲しみを共有するひとにしか出来ない支援があり、また、客観的で冷静な判断をもつ、同じ悲しみを持たない人にしか出来ない支援もあります。悲しみや苦痛に寄り添いながら、不幸の沼の底に共に落ち込んでいくことのない支援です。

それぞれが、自分の立場で何ができるか、気付いた問題点を声に出していかなければならないと思っています。またわたし達も同様だと思いますので、いくつか、これまでに気付いたことをあげさせていただきます。

まずは心のケアの問題です。人にもよると思いますが、事件直後は悲惨ひさんな現実を頭では理解できても心は麻痺まひしたような感じで、他人からは妙に冷静に見えたり、また逆に人格が壊れてしまったように思われたりします。

わたしの母は前者でした。すぐに親戚しんせきや会社に連絡し、混乱の中で通夜、葬式、初七日とつづく行事をこなしました。傍目はためにはしっかりしていると見えていました。しかし、5か月くらい経ったころ、兄を奪われた喪失感と、気も狂わくるんばかりの絶望感に自制心を失いそうになっていることがありました。

細かな雑用や精神面を支えてくれたのは、友人、親戚しんせき、近所の人達でした。特に兄の友人達に、両親は大きな励ましを受けたようです。それらは今も続いています。

そういった手助けや気遣いきづかを身近な人から受けることが出来たわたし達は、とても恵まれた立場でしたが、身近にそういった人達がいないう時、公の機関からすぐに手が差し伸べられたら、どんなに心丈夫こころじょうぶかしれません。

わたし達一家は周囲の人達の温かい見守りの中で、また、事件後知りあった同じ犯罪被害者の方達と接することによって、立ち直ることができましたが、そのような助けのない人には事件直後だけでなく当分の間見守り、声を掛けてともに悲しみを共有するサポーターがいればよいのにと思います。

また、わたしは事件が起こった時にはもう、ある程度の大人で、それなりに逃げ道もあり、息抜きもできる環境でしたが、未成年の子供は限定された地域の中で生活しているので、逃げ場がありません。

最近、児童生徒が事件に巻き込まれた時、その被害者が通っていた学校の一般生徒に向けて心のケアを提供したという報道は見聞しますが、当事者である被害者の兄弟に臨床心理士りんしょうしんりしがついたというような報道は聞きません。一番心に傷を負っているのは家族だと思うのです。事件のあと、真っ先に家族、特に未成年の兄弟の心のケアが必要なのではないかと思います。

行政にもお願いがあります。例えば普通に病気で死亡したとしてもあちらこちらへ提出する書類などで、何度も役所に足を運ぶ事になります。

それが事件、事故となりますと、突然のことであり、遺族は病院や役所だけでなく、警察にも行かねばならず、取り寄せたり、提出したりする書類は非常に沢山のものになります。

わたしの母が役所に父の印鑑証明と兄の死亡届をもらいに行った時、係の人が父の裕という名と死んだ兄の裕一ゆういちという名を見間違えて、死んだのが父だと勝手に誤解して「死んだ人の印鑑証明は出せません。そのカードも処分してもらわなければ」と母が提出した書類を目の前でくしゃくしゃに丸めてしまったことがありました。

ただでさえ悲しい時、どうしてこんな扱いを受けるのだろうと母は本当に辛そうでした。

個人情報観点からは他人に依頼することは難しいけれど、できることなら誰かに代わりにやってもらいたいと母は話しておりました。

これまでの被害者、被害者遺族の方々が活動してこられたおかげで、犯罪被害者の権利を守る制度が整い支援の手が増えています。

そして誰でも被害者になり得る現実があるなかで、今、社会全体が被害者問題について勉強する機会が必要だと感じています。

わたしが期待しているのが学校の授業です。

現在、全国の小中学校で「命の授業」というのが行われています。

講師として呼んでいただいたこともあり、わたしはこの授業がとても重要だと感じるようになりました。

普段生活している中で、事件や死に直面することを意識しながら生きている人がどれだけいるでしょう？

被害者のための制度や必要な知識を、事件に遭あってから獲得するのは精神的にも体力的にも難しいと思います。

ですから、詳しくはなくても最低限の知識を学問として学んでおくのは有意義なことだと思います。

今、事件や死はエンターテイメントの中のひとつとして扱われていることがほとんどです。けれど、その多くは間違っごらくせいた認識や事実に基づいて作られており、娯楽性のために衝撃的な脚色をされています。これでは世間の人々が間違っごらくせいた認識を植えつけられても仕方がないと思います。

例えば、一般の人は、事件直後の被害者に対して、立ち上がる事ができないくらい嘆き悲しむのが当たり前だと思っているようです。

これは母から聞いた話ですが、あるところで、ひとりの女性がこうおっしゃったそうです。「知り合いのお子さんが亡くなって、お葬式に行った時、お母さんが涙も流さず淡々としておられたのを見て家族のつながりが薄かったのかと思ってしまったことがある」と。

しかし、わたしの母もそうであったように、悲惨ひさんな事実にもかかわらず、冷静である人間がいるのです。淡々としているのではありません。心が麻痺まひしているせいなのです。

その妙に落ち着いた様子を見て、冷たい人間だとか、家族のつながりが薄かったのだとか、思わないでほしいのです。

本人は、頭で分かっている、ドラマを見ているような気持ちで、心に膜が掛かっているのです。それは、心が壊れないようにする、人間の自衛本能が働いているからだそうです。

しかし、その後、何もできなかった自分を責めます。涙を流し、喪失の悲しみ、嘆きの言葉を出すようになります。

また、テレビドラマなどで被害者や被害者遺族ふくしゅうが犯人に復讐ふくしゅうする話が多いことも疑問に感じます。

復讐ふくしゅうを簡単に実行することができないからこそ、被害者、被害者遺族の痛みや苦しみは深いのです。

拳句あげくの果てには、被害者は殺されるためだけに登場して、その人生や遺族の痛みには一切触れられず、密室のトリックやアリバイを崩すことに終始している話を見ると情けなくなります。

死とはどういうことか、被害あに遭う、被害者遺族になるということが本当はどういうものなのか、それを学問という形で知っておくことは、必ず死を迎えるわたし達にとって意味のあることだと思います。

また、被害者のための制度や必要な知識を持っていることで、自分だけではなく、友人や、周囲の人々を支えることも出来ます。

被害者支援制度の知識ではありませんでしたが、わたしの友人達はたまたま、心理学、哲学、宗教、民族学などの学問ぞうけいに造詣の深い人々でした。

彼女達のおかげでわたしがどれだけ救われたか知りません。

例えば、お骨こつぽを骨壺こつぽにうつすさい、職員こつぽの人が骨壺こつぽに入れたお骨を細かく砕きました。

わたしはそれを見てひどくショックを受け、車ひに轢かれて痛い思いをしたのに、これ以上兄の

からだ
身体を傷つけないで、と思いました。

ところがその話を友人のひとりにしたところ、「お骨を砕くのは、魂たましいを解放するためで、必要なことなのだ」と教えてくれました。

火で身体を浄化して、形を砕いて魂たましいを解放し、次の世界に送るための行為なのだ、と聞いて、わたしの気持ちは落ち着きました。

またある映画を見に行った時、その中の台詞せりふにこのようなものがありました。

「孤独に歩め、悪をなさず、林の中の象のように」

なんとなく気になっていたところ、別の友人が教えてくれました。

これは釈迦しゃかの言葉で、「憎しみにく」というタイトルがついている。

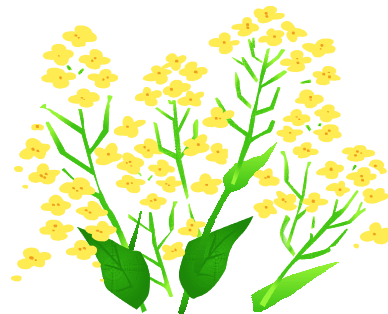
そうして、全体の言葉は「愚かなるものを道連れにするなかれ、孤独にあゆめ、悪をなさず、林の中の象のように」というのだと言いました。

わたしはこの言葉を、「憎しみにくという気持ちを心の奥に抱えていても、言葉や行動で表に出さなければ、持ち続けていてもいい。」そんなふうに理解しました。

この言葉の本当の意味がどういうものかわたしは知りませんし、友人も語りませんでした。犯人への憎しみにくで心が真っ黒になっていた時期、わたしはこの言葉で自分を取り戻すことができました。

友人達が学問で得た知識が、わたしを救ってくれました。

同じように命の授業で学んだ人達によって、これから少しでも誰かの心が救われれば、と期待しています。



命の授業で、わたしはこれまでに述べたような兄の事件の話をさせてもらっています。本当は奪われた命ではなく、新しく誕生する命の尊さについてお話できればと思うのですが、残念ながらわたしにはそうした経験はありません。

ただ、兄の事件を通して、どうすれば命を大切にできるのかということは知ることができました。ですから、授業の最後にわたしはいつも言います。

「今自分の周囲にいる人々に感謝してください」と。

わたし達は不快な物事に関しては敏感ですが、そうではないものに対しては当たり前と感じて気にも留めません。

スーパーで売られている食べ物が、いつも新鮮で害がないこと、毎日乗る電車が時間通りに無事に動いていること、そういったことに常に感謝することは難しいでしょう。

けれど、その当たり前のことは、実は多くの人々の努力や誠意によって支えられているのです。

この世界は厳しくて理不尽なことも多いですが、見て聞いて触れて、心地よいと感じるものもまた、多くあります。

「どうか、自分が嬉しい、楽しい、心地よいと思った時には、それを声に出して伝えるようにしてください。そしてもし不快なことがあれば、どうすればそれをよりよいものにできるか、自分ならどうするか、考えてみて下さい」

いつも授業の最後でお伝えする言葉が、どこに向かっていくのか、結果が出るのはきっと5年後、10年後、あるいはもっと遠い未来のことだと思います。

小さな歩みです。でも、どうかこれからも諦めることなく続けていってほしいと願っています。

長々とお話しましたが、最後にひとつ、お願いをして話を終わりたいと思います。

わたし達家族は兄を失ったあと、さんざん泣きました。何故でしょう？ 兄を失ったから、もちろんそれもあります。でも、それだけではないのです。兄の無念を思って、どんなにか生きたかっただろうかと思って、わたし達は泣いたのです。

兄はこの世界にもういません。死んでしまいました。殺されてしまいました。死んでから、兄は風や星や雪や花や、その他の美しいものになったかもしれません。でも、なにより兄は伊藤裕一というひとりの人間として、平凡な人生を続けたかったはずです。

兄のような被害にあう人がひとりでも減るように、わたし達のような遺族がひとりでも減るように、真面目に働く善良な市民が泣くことのない世の中を作るため、どうかお力をお貸してください。

心よりお願いいたします。

伊藤 裕美